TOPICS

創造工学部 造形・メディアデザインコース／防災・危機管理コース 新入生合宿研修

4月12日・13日にかけて小豆島ふるさと村で行われた創造工学部新入生合宿研修。
12日に行われた紙飛行機の作成とコンテストでは、チームに分かれて紙飛行機を作成し、飛距離、目標物へのアプローチ距離の近さ、デザイン性を競いました。夜に学生は、試作品をたくさん作成し、教員による構造力学やスポーツ工学の観点からのアドバイスも参考に、飛行機の機体や飛ばし方を研究。翌日、各チーム代表者が飛行機を飛ばして競い合い、大いに盛り上がりました。
13日の午後に開催された合同見学会「小豆島の自然災害と文化」では、長谷川創造工学部長による案内で、「小豆島はなぜオリーブの島になったのか」と「なぜ農村歌舞伎は現在まで続いたのか」の 2 点をお題とするまち歩きを行いました。
1つ目のお題を解くカギはオリーブ園にありました。オリーブ園には、現在は多くのオリーブの木が植栽されていますが、その理由は、気候、土壌にあります。なぜ、オリーブの植栽に適した土壌が分布しているのか、この土壌はどこから来たのか。オリーブ園では43年前に何が起こったかを考えていると、答えが見えてきます。人の暮らし、文化は、災害と密接にかかわっていることが分かりました。
2つ目のお題である「なぜ農村歌舞伎は現在まで続いたのか」を解くカギは、中山にありました。中山は、農村歌舞伎舞台と中山千枚田で有名なところです。中山農村歌舞伎保存会の久保会長から歌舞伎小屋について説明いただき、舞台裏と舞台上で、舞台装置の仕組みなども教えていただきました。
また、中山千枚田では、長谷川創造工学部長から、千枚田に欠かせない石積みはどこから来たのか、粘土はどこから来たのか、との問いかけがありました。この問いについて考えていると、「なぜ、ここに千枚田があるのか」という疑問に対する答えについても考えることができます。2つ目のお題に対する回答は、ここでは説明されず、新入生自身でさらに掘り下げて考えることとなりました。

試作紙飛行機の飛行テスト

オリーブ園の見学

中山千枚田の見学

イングリッシュ・カフェからグローバル・カフェへ

4月からイングリッシュ・カフェは「グローバル・カフェ」と名称を変更し、学生や教職員及び地域の皆様に多言語学習・異文化交流の機会を提供し、グローバル時代にふさわしい人材育成と国際交流の推進を担う「場＝コミュニティ」として、新しく生まれ変わりました。
前身のイングリッシュ・カフェは、2014年6月に設立され、この5年の間、英語による実践的なコミュニケーション能力のレベルアップの機会を提供しつつ、留学生と日本人学生の交流の場となっていました。同時に、キャンパスのグローバル化が進む中で、英語以外の言語が多用され、多様な異文化を理解することの重要性も増してきました。そこで、2019年度から名称を「グローバル・カフェ」へと変更し、英語の学習を中心としつつも、中国語・フランス語・スペイン語・ドイツ語・韓国語等の言語クラスを開講し、異文化交流活動を行う施設として新たにスタートを切りました。
今後グローバル・カフェでは、ネイティブスピーカー等による会話指導や、留学生と一緒に受けられる授業、多彩なイベントの開催等を通じて、楽しみながら語学力を高め、異文化の理解度を深めることができるプログラムを提供します。また学内のみならず、地域の高校や諸団体などにも開かれ、多くの方々に気軽に訪ねていただけるグローバルなコミュニティ作りを目指します。
◉グローバル・カフェの授業、イベントの様子、最新の情報については、下記からご覧いただけます。
Twitter　Facebook

Culture Exchange Lunch

アカデミック・フランス語初級講座。一般の方と香川大学の学生や教職員が共にフランス語を学びました。

KADAIGEST
2019.5

香川大学では今後、全学でデザイン思考教育を取り入れていきます。ところで“デザイン”とは何でしょう？ そんな疑問に、創造工学部創造工学科造形・メディアデザインコース10人の先生方に、「デザイン」と「お一人ずつ決められたテーマ」をかけて、語っていただきました。（8回目 /10 シリーズ）

DESIGN× DEVELOPMENT

創造工学部創造工学科造形・メディアデザインコース教授
林 敏浩

私は教育工学を専門分野にしています。教育現場で利活用する教育システムの開発や ICT の利活用を主たる研究対象としています。様々な教育の問題やニーズに対応するために、教育システムを設計、開発、そして、実践をします。また、様々な ICT 機器を組みあわせて面白い教育ができないかと考えたりしています。教育工学のどの部分に着目しているかというと私の場合は教育支援システム開発です。

教育工学あるいは教育支援システム研究者としてこれまで種々の教育・学習分野の教育支援システムを開発してきました。これらの成果を英文で発表する場合の決まり文句が”Design and Development of an Educational System for XXX”となります。Design は設計、Development は開発または構築です。教育支援システムの設計とは教育目的や教育目標に対してどのような機能を持ったシステムを作るのか決める作業です。機能が決まればどのように作っていけばよいか考えてプログラミングしていくのが開発です。

開発では、実装困難な場面にぶつかることも多く、山の頂上は目の前かもしれないぞとがんばることもありますし、今の技術じゃ無理だよねと実装を諦める場合もあります。なので、理想（設計）と現実（開発）の板挟みが Design and Development にはあります。そしてそんな時の決断がとても重要です。しかし、その判断は理詰めでできるとは限りません。結構、説明のつかない決断をする場合があります。実は、よく考えてみると設計をどこまでやって、いつ開発を始めるのか、時にはその決断もうまく説明できなかったりします（後付けで無理矢理説明することはありますが）。というかそういう判断ばかりだったかもしれません。そう考えるといい加減なのですが。

そのような決断は後から考えてみるとそれなりに正しかったと言えることも多いのですが、では、なぜ、そんな判断ができたのでしょうか。それは「直感」だと言えます。よくわからないけどうまく行くだろうという直感が実際は様々な判断や決定に関わっていて、私達の背中をぽんと押してくれます。少し未来を進む自分が現在の自分に良い方向を示しているようにも見えます（NHKの某番組のミニドラマみたいですが）。直感を形作るものは何なのでしょうか。

本当はもう少し丁寧な説明がないとみなさんにわかりにくいと思いますが、「非理詰め」（理詰めでない）の部分が直感に関与しているとするならば、直感を判断として顕在化させるエンジンが「非理詰め」の総体としての「アート」ではなかろうかと思っています。工学から見るとアートのアカウンタビリティは相対的に低いので仕方ないと開き直ってもよいのですが、教育支援システム研究においては、設計や開発を遂行する要素として、アートは大事と思っています。なので、私にとってのアートは日本語訳としての「芸術」ではなく、教育支援システムの設計と開発をつなぐ「直感エンジン」なのです。繰り返しになりますが、アートを大事だと考えています。だから、私は、今、造形・メディアデザインコースにいるのだと思っています。

VOICE

未来のカダイ (香大･課題) 創造アイデアソンに参加して
日本一小さい県ならではの風土を生かした「未来型 ”おせっかい” 政策」を提案

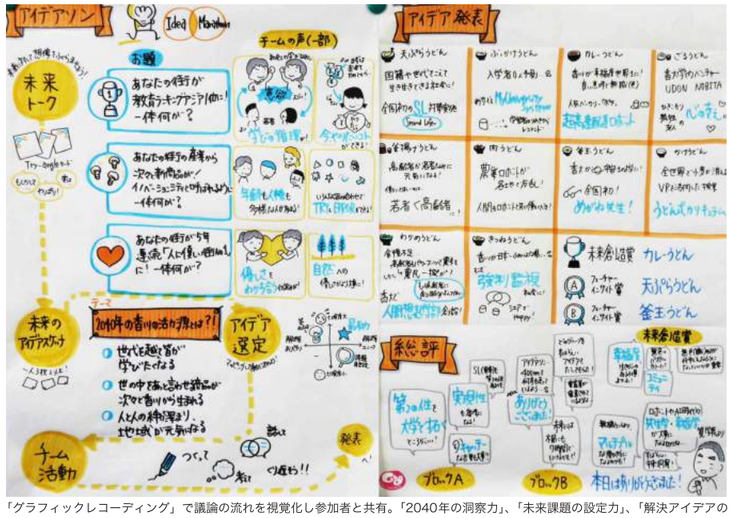
アイデアソンとは、特定のテーマについてグループ単位でアイデアを出し合い、それをまとめていく形式のイベントです。アイデア (Idea) とマラソン (Marathon) を合わせた造語で、2000 年代に米国で使われ始めたと言われています。3 月に香川大学で開催された「未来のカダイ(香大・課題) 創造アイデアソン」では、大学を取り巻く社会状況が大きく変化するなかで、未来の香川の姿やそこで生活し活躍する人々を想像し、未来の香川大学の在り方や求められる役割などについて考えました。

私がアイデアソンに参加して学んだことは、2 つあります。1 つ目は、異年齢の方々と対話をすることの大切さです。本イベントには香川大学の学生はもちろんのこと、多くの先生方や地域の方々が参加されていました。そのため一つの事例について、経済面や環境への配慮、現在の人々の生活における障壁等、多面的な見方で捉えた意見を聞くことができました。経験が乏しい同年代の学生視点では、表面的な討論になってしまいがちです。このような様々な年齢や職業の方々と対話を行うことで多角的に事例を考えたり、新たな発見があったり、自分自身の視野を広げることができました。

2 つ目は、未来の課題を予測して地域の現状を考えるということです。ワークでは 2040 年の香川に出現する課題を考え、グループごとに解決策を未来新聞に描きました。
まず、私自身が、未来の香川県に何を望むのか、どのような生活を送りたいのかを意識しました。しかし、持続可能な政策には、ヒトの立場だけではなく地域の尺度を考えることが必要です。そこで、その政策がその先の時代まで続くものになるように、長期的な見通しをもちながらアイデアを練りました。
そして、私たちが考えたのは、IT 化が急速に進む中で日本一小さい県ならではの風土を生かした「未来型 ”おせっかい” 政策」です。地域課題解決のキーワードとして、人と人とのつながりを挙げました。現在、インターネット社会の発展によって、人と人とのつながりが弱くなっています。だからこそ、インターネットを活用して地域の人々のつながりを強くすることで、綿密な連携が可能になり、それが香川県の強みになるのではないでしょうか。

最後に、このようなアイデアソンが継続的に私たちの学び舎である香川大学で行われてほしいと思っています。大学において地域の課題を多様な視点で考えることにより、地域を「知り」、「育つ」ことができます。そして、生まれ育った愛着のある香川県で「働きたい」と思うようになりました。「香川県をより良いものにするために何が必要なのか」、いつも自分自身に問い、地域に貢献できる人になりたいと思います。

教職大学院教育学研究科 1 年　別所 遥



「グラフィックレコーディング」で議論の流れを視覚化し参加者と共有。「2040年の洞察力」、「未来課題の設定力」、「解決アイデアのユニークさ」の観点から審査を行い、未来創造賞 1 チーム、フューチャーインサイト賞 2 チームを選出し表彰しました。

ポスターセッション／各グループが未来新聞の内容について発表。発想力豊かな課題設定に対するユニークな解決策が示され活発な意見交換が行われました。

香川県内の自治体・企業・高校生・一般公募・香川大学教職員あわせて 40 名が参加。

グループに分かれ、2040年の香川における課題と解決策を想像。

それをブラッシュアップして、「2040 年未来新聞」を作成。

ポスターセッションで発表。

EVENT

瀬戸内国際芸術祭 2019 開会式

学長をはじめ関係者が出席。オープニングの獅子舞演舞には香川大学の学生も参加し熱演しました。今回、大学として初めて出展します。8/24･25と9/28･29に小豆島にある 2 つの農村歌舞伎舞台で演劇を公演します。

教育養成課程 大学入門ゼミ小豆島研修

教員を目指す新入生約 170 名が参加し、香川大学ＯＢでもある壺井栄文学館の大石館長の講話を聴きました。また、岬の分教場、二十四の瞳映画村、小豆島ふるさと村、オリーブ公園などで研修を行いました。

香川大学博物館特別講演会

東京藝術大学大学美術館館長・秋元雄史氏を迎え「現代アート入門 サイトスペシフィック・アートとは？」という演題で講演いただいた。秋元氏が関わった直島でのアート活動などの貴重なお話もありました。

from International Office

ちきゅう見聞録

オーストラリア

教育学部国際理解教育コース
流田果歩
2018年8月末～9月末の5週間、西オーストラリア大学英語研修に参加

授業は月～金の午前から午後にかけての 2 コマでした。放課後は Singing Club や JAPSSOC というクラブで活動をしたり、学校開催のツアーに申し込んだり、友人とパースの街を散策したり、様々なアクティビティを楽しみました。

キングスパーク&ボタニックガーデンは、パースの中心部からバスで程近い場所にあります。昼はピクニックで賑わい、夜は野外ステージが開かれることもあり、市民の憩いの場となっています。パースの町が一望できる場所があり夜景もとてもきれいでした。

バス停留所のアナウンスはありません！通学に毎日バスを使っていましたが、何度降りなきゃいけないバス停を通り過ぎたことか…。ゾーン制で、1 回バスか電車に乗ると、払った金額分以下のゾーン内だったら 2 時間乗り放題です。

read more